

高度成長期の障害者問題と発達保障

特集

障害の重い子どもたちの「生きる証」と
発達へのまなざし

1960年代の記録映像を中心に

玉村 公二彦

要旨

1960年代前半、島田療育園などの重症心身障害児施設の誕生をみるが、障害の重い子どもの発達と療育を支える制度基盤は極めて脆弱であった。障害の重い子どもの生存に関わる問題が社会問題化されていったが、その一端を担ったのが映像である。障害の重い子どもを取り上げた映画ニュースの映像、施設を中心としたセミドキュメンタリー、重症心身障害児の発達を映像として取り出す試みなどを跡づけ、1960年代に重い障害のある子どもの受容や発達を捉える“まなざし”があり、映像として共有されようとしたことを示した。

キーワード 重症心身障害児、障害映像、記録映画、1960年代の障害問題、障害の重い子どもの発達

はじめに——1960年代における障害の重い子ども
の受容と発達へのまなざし

1945年8月の敗戦後、戦禍からの復興へと向かう日本は、1950年に勃発する朝鮮戦争による特需を端緒として、敗戦後の経済復興を果たしていく。さらに、1951年サンフランシスコ講和条約によって占領期を脱した戦後の日本は、冷戦のもとで、1955年体制が築かれた。戦後日本社会の方向をめぐって、60年安保闘争が広がっていく。1960年代には、池田隼人内閣が「所得倍増計画」を発表し、高度経済成長政策を次々と展開していく。東京オリンピックや大阪万国博覧会を契機に、運輸交通網の整備、電化製品の大量生産と消費など国民生活は大きく変容する。その一環として、高度成長を担う労働力の流動化と人材の養成が、教育政策においても課題になっていく。国民生活と情報媒体の変化も大きく、映画・テレビ

など視聴覚の音声・映像などの媒体や記録が広がりをもせることになる。

高度成長の端緒となった1950年代半ばから、三井金属鉱業によるイタイイタイ病（1955年命名）、森永乳業によるヒ素ミルク中毒事件（1955年）、熊本県水俣でのチッソ水俣工場の有機水銀の排出による水俣病（1956年公式発見）、複合企業によって建設された石油コンビナートの一つ四日市コンビナートでの大気汚染による四日市喘息（1960年から）、妊婦のサリドマイド剤摂取による四肢障害児の出生を来したサリドマイド事件（1960年前後）など、障害の発生をともなう国民の健康被害や公害、薬害などが引き起こされ、障害の社会的発生が明確にされてきた。同時に、これまで放置されてきた障害のある子どもの問題も惹起された。このような社会問題の発生は、障害に対する社会的な対応を求める運動、なかんずく障害のある子どもたちの療育・教育を求める運動を燎原の火のように広げるものとなった。そこには、福祉・教育・医療の諸権利が剥奪されていた障害の重い人たちの生存と発達を問題提起する動きが底流に存在した。高度経済成長の歴史的過程

の日本社会とその主体形成の方向として、「経済成長への従属」か「主体としての発達」かが、鋭く問われてきたのである。

この時期、障害の発生や放置されてきた障害の重い子どもの問題はどのように社会的に提起されてきたのだろうか。新聞・ニュースはどのように報道し、そして、障害の重い子どもたちの実態と関係者たちの取り組みは、どのようなまなざしで再構成され、問題提起されたのか、そのなかで重い障害の子どもたちの発達はどのように発見され、共通認識されてきたのか。本稿では、障害の重い子どもたちの報道・放送、ドキュメンタリードラマ映画、そして記録映像¹⁾を点描する作業を通して、1960年代における、障害に関する社会的受けとめ、関係者の受容、そして重い障害のある子どもたちの発達への道筋の探究の萌芽を確認してみたい。

1 障害の重い子どもへの施策の訴え

——映画ニュースの中の重症心身障害児問題

重症心身障害児問題への問題提起となったのが、『中央公論』（1963年6月号）に掲載された水上勉の「拝啓池田総理大臣殿」である。同記事は、障害の重い子どもたちへの施策の貧困を鋭く突いたものであり、作家であり、障害児の親である水上の知名度もあり、政府は対応せざるをえないものだった。黒金泰美官房長官は池田勇人総理に代わって「拝復水上勉様」を翌月号に書き、重症児への対応の表明をすることとなった。

この問題は、映像にも取り上げられることとなった。映画ニュースは、その時々話題を劇場映画の合間に上映するものである。1963年6月の東映ニュース201号（全8分）には、「拝啓池田総理大臣殿」というニュース（1分強）がとりあげられ、「身障児を持つ作家水上勉が池田首相に宛てた質問状に端を発した社会福祉問題の改善」として紹介されていた²⁾。

この映画ニュースは、水上の首相宛ての質問状についての語り、閣議・厚生省児童局の映像とと

もに西村英一厚相のコメントがあり、訓練士たちの研修風景、養護施設の重度身障児と家庭でのリハビリの様子、そして障害児を励ます各地の催し物、水上の質問に対する黒金官房長官のコメントなどで構成される。映像には、在宅で紐につながれた重度児、島田療育園、国立療養所東洋病院清瀬病棟、神奈川ゆかり病院などの様子や重度児の姿、家庭で母親に訓練される脳性マヒ児、介護される重症児の状況が、「不幸な子どもたちの姿」として点描されている。

さらに、「若い世代—おばこ天使」と題された東映ニュース第329号（1965年11月）には、秋津療育園（東京）に秋田から就職した若い保育士9名を紹介しつつ、重症児の食事介助やベッドを整える姿が映されている。また、「ある看護日誌」と題する東映ニュース第503号（1969年3月）は、北療育園（現在の東京都立北療育医療センター）の看護師の夜勤を中心として構成され、看護師不足の状況と増員を求める運動が放映された。

大毎ニュース761号（1966年2月）では、「私は訴える ベッドが欲しい・看護婦が欲しい」と題して放映されていた。この映画ニュースについて放送ライブラリー（公益財団法人放送番組センター）では次のように概要を伝えている³⁾。

重症の心身障害児を抱える男性。4年前に奥さんを亡くし、男手ひとつでこの子を育ててきた。子供に泣かれ、何度親子心中を考えたか分からないという。だから1日も早く国で重症心身障害児の施設を作って欲しいと涙ながらに訴える。全国にはこの様に寝たまの重症児たちが、約3万人いるといわれている。2人の障害児を持つ人は子供を入院させるのに3年も待たされている。この様な専門の施設は全国に3ヶ所、ベッドの数は僅か300しかない。この程滋賀県に100人を収容できる施設が完成した。しかし看護婦の応募が1人もないため、子供たちを受け入れる事が出来ない。折角出来た新しい施設も宝の持ち腐れだ。もっとベッドが欲しい、看護婦さんが欲しい。

この映画ニュースは重症心身障害児の現状と施策の必要を示すもので、在宅の重症児、秋津療育園の状況、開設されたばかりの第二びわこ学園の職員不足問題とそれを訴える在園児、政府の対応として鈴木善幸厚生大臣の談話、そして、最後に